

「あなたは、わたしを愛しているか」

マルコによる福音書 14 章 27-31 節

森島 牧人 牧師

最後の晩餐を終えた一同は、オリーブ山に出かけたと聖書にあります。今日の聖書はその途上でのことで、主は弟子たちに「あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると羊は散ってしまう』と書いてあるからだ。しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」と言われます。それに対するペトロの「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません。」に対し、主は「はっきり言うておくが、あなたは今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」と言われたのです。弟子の代表格であったペトロは憤慨し「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」と力を込めて言い張ったのでした。他の弟子たちも同じだったと聖書は記しています（マルコ 14:27-31）。

ここにペトロの傲慢さが見えるのですが、これは彼だけではなく誰にでもある自己義認の罪の姿です。主の警告に対しペトロは、自分の死を持ち出して決定的な誓いの言葉としたのですが、この時彼には、己の神に対する誓いがどんなものが分かっていたいかなかったのです。死の恐怖を前に脆くも崩れ去る人間の覚悟や誓いは遠藤周作の作品にも出て来ますが、人間は本能的に自分を庇い、死や拷問から逃れようとする狡さを持っています。大祭司の屋敷の中庭で三度主との関係を否定した直後にペトロが聞いた鶏の鳴き声、それは主の前でのペトロの誓いが無残にも崩れ去った瞬間でした。

しかし、これはペトロを代表とする人間の如何ともし難い罪の実体です。律法的な行為で、主の十字架を必要としない自己義認。パウロは「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。」（フィリピ 3:9）と言っています。アダム以来、人間は神の前に罪を犯し、約束を破り続けて来ました。そんな人間にとって、神の前に赦しを乞い、神に受け入れていただく以外の生き方はあり得ません。それを知った上で十字架に付かれた主。私たちの神への誓いや信仰告白は、この主イエスの十字架の出来事無しにはすべて空しいのです。

さらにパウロは「・・・生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」（ガラテヤ 2:19-20）と言っています。その意味では主と死を共にすることの出来なかったペトロですが、主はこの出来事の数日前に、「あなたはメシア、生ける神の子です。」とのペトロの信仰告白に対して「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現わしたのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」（マタイ 16:16-18）と言われています。この時のペトロの信仰告白は、鶏の鳴き声と共に崩れるのですが、主なる神はその弱き者を捉え、生かして復活の主イエスを土台とした揺らぐことのない教会をそこにお建てになります。人間の信仰は揺れ動きますが、神の子主イエス・キリストの命を基盤とした教会は、永遠に動くことはないのです。

約束どおり先にガリラヤに行かれた主は、不漁で一晩を無駄にした弟子たちを夜明けの岸に立って迎え、網を下ろす場所を教え、大漁（魚は教会の信仰告白の象徴）の喜びをお与えになります。御自身の復活の事実と宣教が神の業であることを示されてのことでした。そして疲れ果てた弟子たちに用意されていた炭火で焼かれたパンと魚、それは主が共におられる教会の聖餐の交わりであり、それこそが永遠の命による救いの約束だったのです。

食事が終わると主はペトロに「わたしを愛しているか」と三度問われ、その度にペトロは「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えます。それを受けて主は「わたしの羊を飼いなさい。」と繰り返されます。これは羊の散ってしまうことを案じられた主とペトロとの＜新しい契約＞だったのです（ヨハネ 21:15-17）。

主はペトロの離反の予告の中でサタンの企みを告げ、「信仰が無くならないようにあなたのために祈ったから、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われています（ルカ 22:31）。このペトロへの使命が、新しいミッションとして私たちに迫って来るその時が、クリスマスであり、主イエスの十字架、そして復活の出来事であるのです。

（説教要約 羽入田悦子）